

ヒノキ腐朽の実態解明

県森林研・片桐さんに樹木医学会奨励賞

「幹の傷から菌」突き止める

専門研究員(38)
県森林研究所の片桐奈々
が、ヒノキ

の根株が腐朽する被害の実態や病害特性を明らかにし、本年度の樹木医学会奨励賞を受賞した。県内で約9千本の根株を調べ、地表近くの幹の傷から病原菌が侵入し、腐朽するリスクが高いことを突き止め、高く評価された。

害は全国各地で確認され、県内では10年ほど前から確認されている。幹の内部が軟化し、空洞化して木材価値が低下することが課題となつており、全国2位のヒノキ蓄積量を誇る県として対策が必要だった。

片桐さんは3年間かけて

2年以内の根株8982本を調査し、広範囲で被害を確認した。約19%が被害を受け、ほとんどが軽度の被害だったことを明らかにした。病原菌の侵入口にも着目し、幹の傷からの腐朽が73%を占め、幹の傷を防ぐ対策が有効と結論づけた。

研究成果は2020年に発表した。根から病原菌が侵入すると考えられていた中で、業界内で注目を浴びた。昆虫や獣害対策だけではなく、残存木を傷つけない間伐作業が木の利用価値を高める上で重要と林業者らに周知している。

樹木医学会は樹木医や研究者ら639人が所属する学会。奨励賞は40歳未満の若手会員を対象にしたもので、都道府県林業試験場研



樹木医学会奨励賞の受賞を喜ぶ
片桐奈々さん=県庁

究員の受賞は初めて。片桐さんは「受賞を励みに県の木材価値を高める研究を続けたい」と意気込んだ。
(青山和史)